

MJOT 会報

『セーカーチ・アンナ MJOT 会長挨拶』

前年度に引き続き、今年度も代表を務めることになりました。会員の皆さんから寄せられた信頼に応えられるよう、運営委員会のメンバーと一緒に努力していきます。今年度は教師会セミナーの充実を図ろうと、今活動計画を練っているところです。これまで同様、皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。

国際交流基金 BP 事務所より

『離任挨拶』 所長 豊田昌一

先ずは、「第 7 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム」の開催について、ご成功誠にめでたうございます。また実行委員会の皆様、大変お疲れ様でした。

欧州各国からご参加された教師の皆様からも、多くの評価の声が届いていることと思いますが、同シンポジウムに参加した基金関係者からも、非常によいシンポジウムだったとの声が当事務所にも寄せられています。どうかこうした声をバネに、さらなる教師会の飛躍と活躍を期待したいと思います。皆さんにはその力があるのですから。私事ですが、先日帰国の発令を受け、10 月の中旬に後ろ髪を引かれる思いで日本に帰ります。思い残すことは多々ありますが、貴教師会の発足からお手伝いできたことは貴重な経験でした。後任の所長である「古屋昌人（ふるやまさと）」は、10 月 6 日に着任しますので、私以上にご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

皆様、また会う日までどうぞお元気で！

『着任挨拶』 日本語教育アドバイザー

齊藤 眞美（ますみ）

先ずはご挨拶から。去る 8 月 11 日、岩澤和宏日本語教育アドバイザーの後任として着任しま

した齊藤眞美です。すでに多くの MJOT 会員の先生方にお会いすることができましたが、これからさらに諸機関を訪問し、いろいろな先生方からお話が伺えることを楽しみにしています。

9 月に行われた「第 7 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム」は、MJOT の活動を発信できるよい機会であり実際大成功であったと感じました。シンポジウムの運営に当たられた実行委員の先生方をはじめブダペスト商科大学のスタッフの方々、JOCV のの方々には会場から大きな拍手が贈られました。若井先生の口頭発表の後には、活発な質疑応答が飛びかい、今後の研究成果をさらに期待する声が多く聞かれました。菊地先生の発表は、専門性と実践性の両面を兼ね備えた内容で、参加された先生方から熱心な質問が次々と出されていました。キッシュ先生と吉瀬先生によるワークショップ発表では、ハンガリーにおける初・中等教育の現状、授業方法、教材、教師会の具体的活動等が広く参加者の関心を集めていました。今回発信したことが今後どのように展開していくのかは、これからの MJOT の活動と共に大いに注目されるころだと思います。今後も着実な活動を通じ、より強固で実効性のある教師会となられていくことを心から期待しています。教師会の発展は、ひいては日本語学習の向上につながるものであると考えます。そのために、日本語教育アドバイザーとして（また MJOT の「顧問」として）適切な支援が行えるよう努めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

君はどう思う？

日本語教育界でも「教師養成ではなく教師成長！」という時代になってきています。自己を成長させるためには、まず己の姿を客観的に捉えることが必要ですが、そう言われてみても何をどうすればよいのやら…

そこで、ここではハンガリーで出版されている「チョークからビデオまで」という外国語教授法の入門書のQ&Aを読み、そこで自分自身が感じたことを「教師としての己の姿を客観的に見る」チャンスにしようと思います。さあ、あなたは どう思いますか？

Q：宿題をやってこないんです。

A：もしこれが学校教育機関での話しでしたら、それは教師側が「ペナルティー」あるいは「評価」をうまく使っていないからだだと思います。もちろんペナルティーといっても厳しくする必要はありませんが、それ自体が不必要とは言いつてもいいかもしれません。もし宿題を与えても、それを評価しなければ（例えばそれを成績に加算しなければ）学習者は宿題をすぐやらなくなるでしょう。語学学校のような成人を対象にしたグループの場合には、宿題ができない原因は主に時間の不足と考えられます。この場合教師ができることはあまりありません。いずれにせよ教師が学習者に「宿題の意味」をきちんと説明し理解させることが大切です。

Q：グループ活動の時、仲間によつて積極的に参加しない人がいると思うんですけど。

A：はじめのうちは、グループ活動が苦手な人もいるかもしれません。でも例えばあまり活発に話をしない人にはメモをとる役とか辞書をひく役とかを与えれば、グループでも活躍できますし、そういう「認められる」経験を積めば、いつしか積極的にグループ活動に参加するようになると思います。

„A KRÉTÁTÓLA VIDEÓIG” 40/41 ページより。(若井)

最近読んだ本

„ITK és az Állami Nyelvvizsga” 「外国語研修局と外国語国家試験」 *Az idegen nyelvi mérés és értékelés elmélete és gyakorlata* 「外国語 (能力) の測定・評価の理論及び実践」 (2002) Bárdos Jenő, Nemzeti Tankönyvkiadó 248-251

《概略》

①1950年代後半 ELTE を中心として外国語国家試験準備グループが誕生。

②1967年、ITK (外国語研修局) ができ、外国語国家試験制度にGOサイン。(ITKには試験対策コースも設置されることになった。)

③1969年、外国語国家試験スタート。当時の試験内容は「母語と学習言語との相互翻訳」。口頭はそれほど重視されておらず、まず筆記試験を行い、それに合格したものが口頭試験に進んだ。口頭試験の内容も「母語と学習言語との相互翻訳」。

④1970年代終り頃、試験制度がかわり「RIGÓ通り試験制度」とも呼ばれるシステムがスタート。口頭試験の比重が重くなり、筆記・口頭の試験の順番もどちらでもよく、また両者の総合点で合否が決定されるようになった。また口頭試験には聴解もスタート。

⑤1980年代終り頃、試験制度が再度変更。筆記試験と口頭試験がそれぞれ独立したものとなった。(筆記のみ、口頭のみ、総合の3つの試験が誕生し、筆記と口頭をバラバラで受けても両者とも合格すれば、総合テストの合格証明書がもらえるようになった)ただ翻訳・通訳は依然として重要視された。

⑥90年代に入り、海外の語学試験も国家試験と同等のものとして認定されるようになってきた。また「外国語としてのハンガリー語」の試験に関しては「受験者の母語との相互翻訳」などの試験がなくなり1言語(ハンガリー語のみ使用)の試験となった。

尚、ITKの語学試験に関してはwww.itk.huを参照してください。

(若井)

2002 年第 7 回ヨーロッパ 日本語教育シンポジウム報告

シンポジウム実行委員 佐藤紀子

秋晴れの爽やかな青空の広がる、去る 9 月 6 日から 8 日までブダペスト商科大学貿易学部において第 7 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムが、ハンガリー日本語教師会(MJOT)とヨーロッパ日本語教師会(AJE)の共催で開催された。欧州 21 カ国を中心に、日本、アメリカを含む世界 26 カ国から 150 余名が参集し、「多元化する日本語教育—日本語教育とコミュニケーション」をテーマに有意義な 3 日間を共有した。

産声を上げて 2 年足らずのハンガリー日本語教師会としては、初めて迎えるビッグイベントである。6 名からなる実行委員会がほぼ 1 年をかけて準備してきた成果がこの 3 日間で問われる。実行委員は前夜から準備と興奮で眠れない夜を過ごした。さて、初日、開会式にはマードル・ダルマ大統領夫人ならびに松本和朗駐ハンガリー日本大使のご臨席を賜り、教師会メンバーは感激もひとしおであった。

初日の基調講演は山中桂一東洋大学教授による「留学生の日本語」。夜の歓迎レセプションでは後援者から提供された寿司やハンガリー名物グヤーシュ&トカイワインに参加者から歓声が上がり、歓談の輪が広がった。

二日目は、ハンガリーからセーペ・ジェルジ・ペーチ大学教授が「ヨーロッパの言語政策から見た言語権と言語政策」と題する講演を行い、EU の言語政策において非ヨーロッパ言語である日本語が一定の地位を獲得するために、AJE が EU に働きかけを行うよう提言したのが印象に残った。この夜はハンガリー情緒溢れるカルパチアレストランでジプシー音楽を聴きながらの懇親会が開かれた。参加者はパプリカチキンに舌鼓を打ちながら、旧交を温め、新たなネットワーク構築と情報交換をはかるひとときを過ごした。宿舎への帰途、バスの中からブダペストの光り輝く夜景を眺める機会があり、三日間会場に缶詰となって勉強に励む参加者には大好評であった。

三日目は、欧州日本語共通教材開発プロジェクトのまとめ役である鎌田修京都外国大学教授が「接触場面の教材化—ヨーロッパと日本を舞台に」と題し、実際の接触場面を撮影したビデオを紹介しながら、この教材開発の理論的枠組みと現状及び課題について語った。聴衆から共通教材の完成に大きな期待が寄せられた。その後、5 人のパネリストにより、今回のメインテーマ「日本語

教育とコミュニケーション」について討議が行われた。司会はセーカーチ・アンナ・ブダペスト商科大学準教授、パネリストはエシュバツハ・サボー・ヴィクトリア・チュービンゲン大学教授、ヒダシ・ユディット神田外語大学教授、鎌田教授、川口義一早稲田大学教授、山中教授。ヒダシ教授の問題提起に始まり、各パネリストが意見を述べたが、最終的には、初級段階からコミュニケーション重視の日本語教育が重要であるという点で意見が一致した。

3 日間で 33 の口頭発表、ワークショップ発表が行われ、各セッションで活発な議論が交わされた。MJOT 会員による発表も 5 本(川村、菊池、キシユ&吉瀬、高橋、若井の各氏)あり、大変好評であった。また、ハンガリーからは MJOT 会員 24 名、非会員 8 名が参加し、講演やパネル討議、口頭発表に熱心に耳を傾け、ハンガリーの日本語教育界におけるシンポジウムへの関心の高さがうかがわれた。

今回、ノンネイティブの教師・学習者の参加者が従来を上回り 20 名近くに達したことは、今後の日本語教育の発展に大きな意味を持つと考えられる。また、旧東欧で初めて開かれたとあって、地元ハンガリーをはじめ、チェコ、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア、ウクライナ、トルコ、カザフスタンなど「東」からの参加者が増えたのも特徴の一つであった。奇しくも EU の今後の進路と同様に「東に拡大する」ヨーロッパ日本語教師会を見る思いであった。

3 日間のシンポジウムを無事終了することができたのも、助成をしてくださった国際交流基金本部、後援をしてくださった国際交流基金ブダペスト事務所、シンポジウム実現のために貴い寄付をしてくださったハンガリー在住の団体・個人の方々、そして準備を含めて 4 日間の期間中総力をあげて協力して下さった国際協力事業団 JICA 青年海外協力隊の日本語教師の方々と日本語を学ぶカーロリ大学、ブダペスト商科大学の学生達のおかげである。実行委員会として、この場を借りて皆様にお礼を述べたい。

今回のシンポジウムにおいて参加者が、21 世紀の日本語教育理論の動向に耳を傾け、他国の教育事情を理解しあい、又ネイティブとノンネイティブあるいは教育機関や教育段階などの違いを超えて交流を図り、教師・研究者として刺激と活力を得られたとしたら、実行委員会としてこれ以上の喜びはない。

(2002 年 9 月吉日)

日本語教師に必要な カウンセリング技術(4)

小松慶子 (こまつよしこ)

元流山市教育委員会カウンセラー

(前号と一部重複)

2) 共感的理解

クライアントと共に、クライアントが感じているかのように感じとる。しかもクライアントの感情の中に巻き込まれない。

クライアントの心の内側に入りきって、クライアントの目で周囲や自分を見れば、こういうふうに見えるのだなあ、「感じ」を共有し合うようなわかりかたです。

(ク：クライアント カ：カウンセラー)

ク：わたし、もう子どものことが苦になりましてね。

… (中略) …あまりのテレビっ子でつい大きな声でどなってしまうのですよ

カ：いやあ、よくわかりますよ。… (中略) …じつはうちにも小学校3年の坊主がいるんですが、… (中略) …やっぱりテレビっ子でほとんど弱ってまいりますよ。… (中略) …

カウンセラーはテレビっ子をもてあます母親の苦しみ、我がことのようによく理解できるので「よくわかります」と言っています。これは共感的理解であるかのように見えますが、じつはそうではありません。いうならば同情的理解なのです。クライアントとよく似た体験をもっているので同情し、相手の感情にまきこまれてしまったわけです。二人が「弱った」「困った」と言い合っているだけでは、どうどうめぐりで援助も成長もあったものではありません。

たまたま相手と似通う、あるいは共通する感情や考え方や体験をこちらがもっていたので、それを通して相手が理解できたかのような気がしているにすぎないことが多いようです。「あなたの気持ちはよくわかる」と思っていますが、事実は理解しているのではなく、こちらの感じ方、考え方でおしはか

っているにすぎない場合が多いのです。このように安易に「よくわかる」といってしまう、その一体感はカウンセリングにおいては危険きまわりないものなのです。クライアント側からいうと「カウンセラーに私の気持ちはわかってほしいけど、同情はされたくない」という感情があります。同情されているような感じが伝わってくると、反発したくなったり、自分がみじめになったりします。「あなたの気持ちはよくわかります。」といわれると「さあ、どういふふうにわかってくれたのかな」とか「そんな簡単に理解してもらえるようなことじゃないわ」という疑念や不信の念が心をかすめます。「私も同様な経験がありますよ。じつは・・・」なんて応じられると「ちょっと待って！しまいまで私のいうことを聞いてください。あなたの経験談を聞きにきたのではありませんよ。」といたくなくなってしまいます。

「クライアントの怒りや恐怖や混乱をあたかも自分自身のものであるかのように感じたり、しかも自分の怒りや恐怖や混乱がその中に巻き込まれないようにすることが共感的理会」だとロジャーズは書いています。

カウンセラーがあたたくクライアントの気持ちを理会しようとするとき、相手の感情にまきこまれているか、相手の感情を「私」と「感情」を別なものとして、はっきり感じとれているかによって、同情と共感が分かれそうです。例えば上記の例の場合は「かまわないようにしようとは思いつつ、ついいらいらしてどなっちゃうのですね。」と応じてみてはどうでしょうか。また「放っておけないという感じ」という簡単な言葉でも共感的理会の態度は十分に伝わる場合があります。

人と人との心が深く通じ合い共に生きる喜びをわかちあうためにカウンセリングの心理学者(アメリカ) ガール・R・ロジャーズは日常の対人関係の中でだれでもいつでもどこでもカウンセリングの心を活かせる方法を明らかにしてくれました。これは「一人の専門カウンセラーを養成するよりも、万人の胸にカウンセリングのこころを育てよう」というものですが、以下ロジャーズが主張する「クライアント(相談者)中心」と呼ばれるカウンセリング理論にふれてみたいと思います。

ハンガリー日本語教師会会報第5号(2002年10月10日発行)発行者：MJOT(担当：若井誠二)
なお、「MJOT会報」は国際交流基金ブダペスト事務所の協力により発行されています。